



国家戦略分野の若手研究者及び博士後期課程学生の育成事業（BOOST） 次世代 AI 人材育成プログラム（若手研究者支援）における 2025 年度新規研究課題の決定について

JST（理事長 橋本 和仁）は、国家戦略分野の若手研究者及び博士後期課程学生の育成事業（BOOST）次世代 AI 人材育成プログラム（若手研究者支援）の 2025 年度研究提案募集における新規採択研究課題を決定しました。

本プログラムでは、国家戦略上、重要で緊急性の高い分野として設定した次世代 AI 分野（AI 分野および AI 分野における新興・融合領域）を担う優秀な若手研究者の研究課題を募集により選定し、その研究活動を支援することを通じて、日本の国際競争力の抜本的強化を図ることとしています。国家戦略分野である次世代 AI 分野への挑戦を志す若手研究者が、所属機関にかかわらず、最適な場所を求めて自由に独立して研究に従事し、ステップアップできる環境の構築および待遇向上を目指します。具体的には、若手研究者がクロスアポイントメント制度を活用し次世代 AI 分野の研究環境が充実した研究機関で行う研究開発を支援します。自身が持つ高い専門性を生かしつつ、それを超えた異分野融合によって国家戦略分野にチャレンジする意欲を喚起し、また、産学官のセクターを超えた複数の組織への所属を推奨することで国家戦略分野に従事する人材の流動化を促進します。

2025 年度研究提案の募集を 2025 年 4 月 30 日（水）から 6 月 26 日（木）正午まで行い、多様な研究者から 237 件の応募がありました。

募集締め切り後、書類選考と面接選考（事前評価）を実施し、59 件の研究課題を採択しました。今後、クロスアポイントメント協定の締結、それによる適切な給与増の実現、その他採択時に提示した条件が整い次第、研究を開始します。

詳細は以下のウェブページを参照してください。

URL : <https://www.jst.go.jp/program/boost/yr/index.html>

＜添付資料＞

別 紙 : 2025 年度国家戦略分野の若手研究者及び博士後期課程学生の育成事業（BOOST）

次世代 AI 人材育成プログラム（若手研究者支援） 採択課題一覧

参考 1 : 2025 年度国家戦略分野の若手研究者及び博士後期課程学生の育成事業（BOOST）

次世代 AI 人材育成プログラム（若手研究者支援） 評価者一覧

参考 2 : 選考の観点

＜お問い合わせ＞

＜事業に関すること＞

科学技術振興機構 創発的研究推進部

〒102-8666 東京都千代田区四番町 5 番地 3

吉益 雅俊 (ヨシマス マサトシ)

E-mail : boost-yr-inquiry@jst.go.jp ※お問い合わせは電子メールでお願いします。

＜報道に関すること＞

科学技術振興機構 広報課

〒102-8666 東京都千代田区四番町 5 番地 3

Tel : 03-5214-8404 Fax : 03-5214-8432

E-mail : jstkoho@jst.go.jp

＜科学を支え、未来へつなぐ＞

例えば、世界的な気候変動、エネルギー資源、感染症や食料の問題。私たちの行く手にはあまたの困難が立ちはだかり、乗り越えるための解が求められています。JST は、これらの困難に「科学技術」で挑みます。新たな価値を生み出すための基礎研究やスタートアップの支援、研究戦略の立案、研究の基盤となる人材の育成や情報の発信、国際卓越研究大学を支援する大学ファンドの運用など。JST は荒波を渡る船の羅針盤となって進むべき道を示し、多角的に科学技術を支えながら、安全で豊かな暮らしを未来へとつなぎます。

JST は、科学技術・イノベーション政策推進の中核的な役割を担う国立研究開発法人です。

**2025年度国家戦略分野の若手研究者及び博士後期課程学生の育成事業（BOOST）
次世代AI人材育成プログラム（若手研究者支援）採択課題一覧**

(氏名五十音順)

研究提案者氏名	所属機関（提案時）	役職（提案時）	研究課題名
蟻生 開人	株式会社サイバーエージェント	リサーチサイエンティスト	実世界環境への適応性を加速する逐次の意思決定手法の探求
易 利	茨城大学	准教授	テラヘルツ波×AI融合による人感を超える次世代センシング基盤の構築
石田 隆	理化学研究所	研究員	AI技術の評価を支える技術基盤研究
五十川 麻理子	慶應義塾大学	准教授	異種センサ融合による複雑シーンでも高精度な人物状態推定技術
海塩 渉	東京科学大学	助教	AI×建築学×医学が拓く住宅環境による先制医療
王 桢	大阪大学	特任助教	加齢応答AIのマルチモーダル解析基盤
大城 泰平	北海道大学	特任准教授	組合せ的科学計算による反応速度論数値解法の深化
笠原 俊一	株式会社ソニーコンピュータサイエンス研究所	リサーチャー	AIセルフクローンによる自己拡張と共進化的関係の構築
加藤 祥太	京都大学	助教	製造プロセスを理解するマルチモーダルAIによる知識継承とモデル生成基盤の創出
兼重 美希	京都大学	助教	脊髄損傷者の生活改善を実現するAI制御神経回路の開発
唐木田 亮	産業技術総合研究所	主任研究員	安定な大自由度AIシステムの指標とその継続的学習・推論への展開
河合 宏紀	エルピクセル株式会社	エンジニア	3次元電子顕微鏡画像の統計的定量解析を可能とするAIの開発
川野 貴久	福井大学	助教	リアルタイムに院外心肺停止患者の自己心拍再開を予測する次世代AIの開発
北野 和哉	奈良先端科学技術大学院大学	助教	波動光学と機械学習の融合による偽造困難な個体識別技術の実現
久野 拓真	名古屋大学	助教	ピコ秒応答を可能とするAI型光送受信器
古賀 太一朗	高エネルギー加速器研究機構	助教	低遅延リアルタイムAIを用いた未知の物理反応の探索
小林 成	東京大学	助教	AIエージェント化による放射光オペランド計測の自在化
ハシント・コラン	名古屋大学	研究員	Generative Constraints for Embodied AI: Human-in-the-Loop Adversarial Self-Learning
斎藤 嘉人	新潟大学	助教	3種類の光学応答と高次元データ解析で実現する品目横断型の食品品質評価
坂田 逸志	理化学研究所	特別研究員	深層学習の内部ダイナミクス制御に基づくAI設計と応用
佐久間 航也	名古屋大学	助教	Scaling up PDB-Descriptome Project
笹野 裕介	東北大学	准教授	高精度収率予測モデルによる有機酸化反応の理解
佐藤 正寛	東京大学	准教授	外挿スケーリング則で拓く未踏材料探索AI
塙見 準	大阪大学	准教授	セキュア光AIコンピューティング基盤
瀧谷 遊野	東京大学	准教授	多様な認知特性を踏まえた偽誤情報対策生成AIの研究と基盤創生
瀧 迅	東京農工大学	准教授	多主体協働型介護支援システムの開発
清野 雄多	大阪大学	特任研究員	PADIN構想による国際標準AIプラットフォームと社会実装エコシステムの創生
孫 鶴鳴	横浜国立大学	准教授	大規模言語モデルによるエッジクラウド・セマンティック通信システム
大門 俊介	量子科学技術研究開発機構	主任研究員	生成AIとデジタルツインによる量子ビット制御革新
高木 優	名古屋工業大学	准教授	基盤モデルによるシステム神経科学研究の加速
竹内 孝	京都大学	講師	時空間コモングラウンドを介したAI協働基盤の研究
チャン・フ・ズイ	東京科学大学	助教	AI framework for cell-penetrating peptide design to control its dynamics
チヨ・シンキ	京都大学	特定准教授	人間・社会の理解に基づく創造的機械翻訳
塙越 柚季	東京大学	講師	古典文献読解のための翻訳・註釈生成モデルの構築
土屋 平	東京大学	助教	適応的オンライン凸最適化の機械学習基盤技術としての展開
徳田 悟	九州大学	准教授	観測ノイズがベイズ学習に与える影響の統計力学的研究
中川 誠太郎	大阪大学	特任講師	AIが紡ぎ出す、希少性疾患の創薬・超個別化医療の共創エコシステム
中村 友哉	大阪大学	准教授	圧縮センシングを駆使した超小型全方位カメラの創成
七島 幹人	東京科学大学	助教	計算量理論的万能帰納推論の基礎理論の構築

研究提案者氏名	所属機関（提案時）	役職（提案時）	研究課題名
萩原 広道	大阪大学	講師	「反・大規模データ」で学ぶ赤ちゃんの言語発達過程の解明
橋本 和宗	大阪大学	准教授	対話と論理仕様で実現する知能制御システムの高信頼化
濱田 雄太	高エネルギー加速器研究機構	助教	データ科学としての超弦理論の新展開
バリンヤ・ブンボンサノン	埼玉大学	准教授	「食×AI」AIと食品DXによる次世代ヒューマン・フード・インターラクション
マシュー・ジェームズ・ホーランド	関西大学	准教授	広義の学習過程における自己統制機能の開拓
間島 慶	量子科学技術研究開発機構	研究員	脳解読で明かす動物の主観体験
御手洗 彰	京都大学	助教	マルチモーダル生成AIによる双方向Motion-EMG生成を用いた次世代リハビリテーション評価システムの開発
宮原 英之	北海道大学	准教授	統計学に基づく創発現象の基礎理論の確立と応用
三好 智也	東京大学	特任助教	知覚～判断を統合する電荷記憶型柔軟AI構造体の構築
棕田 悠介	東京大学	講師	大規模言語モデルを活用した汎用的なポリシーの獲得
村上 力輝斗	東北大学	助教	機械学習による撥液結晶育成法の最適化
森下 侑哉	京都大学	助教	核融合プラズマの総合制御に向けたデジタルツイン構築
森田 豪	北海道大学	博士研究員	遠隔運転と強化学習を組み合わせた農業ロボットの研究
山下 泰信	大阪大学	助教	機械学習による化合物設計と実験の融合による新規創薬方法論の開発と応用
横井 祥	国立国語研究所	准教授	低ランク性に基づく新しい言語科学
横山 光	東京農工大学	准教授	ヒト海馬の記憶活動を非侵襲AIで捉え運動学習を紐解く
吉田 聰太	宇都宮大学	准教授	古典×量子×AIによる次世代原子核計算科学の創出
李 勝	東京科学大学	助教	Next-Generation Spoken-Language Processing for Robotic and Edge AI Devices Empowered by LLM LLMで強化された次世代ロボット・エッジAI向け音声言語処理
李 静沛	統計数理研究所	准教授	Next-Generation Manifold Optimization for Efficient and Accessible AI 「誰でも使えるAI」の実現へ：多様体最適化による計算資源の壁の打破
レイ・タン・タム	統計数理研究所	助教	Enhance AI Foundations from Optimal Transport Theory

2025年度国家戦略分野の若手研究者及び博士後期課程学生の育成事業（BOOST）
次世代AI人材育成プログラム（若手研究者支援）評価者一覧

※所属・役職は2025年11月時点のもの

プログラムオフィサー（PO）

河原林 健一	情報・システム研究機構 国立情報学研究所 情報学プリンシブル研究系 東京大学 大学院情報理工学系研究科	教授 教授
--------	--	----------

アドバイザー（AD）

荒瀬 由紀	東京科学大学 情報理工学院	教授
五十嵐 健夫	東京大学 大学院情報理工学系研究科	教授
岩田 覚	東京大学 大学院情報理工学系研究科 北海道大学 化学反応創成研究拠点	教授 特任教授
上田 修功	理化学研究所 革新知能統合研究センター	副センター長
牛久 祥孝	オムロン サイニックエックス株式会社 リサーチアドミニストレイティブディビジョン	リサーチバイスプレジデント
宇野 毅明	情報・システム研究機構 国立情報学研究所 情報学プリンシブル研究系	教授
大岡 龍三	東京大学 生産技術研究所 人間・社会系部門	教授
大槻 知明	慶應義塾大学 理工学部	教授
岡崎 直観	東京科学大学 情報理工学院	教授
岡田 康志	理化学研究所 生命機能科学研究センター 東京大学 大学院医学系研究科	チームディレクター 教授
鹿島 久嗣	京都大学 大学院情報学研究科	教授
唐沢 かおり	東京大学 大学院人文社会系研究科	教授
腰原 伸也	筑波大学 数理物質系	客員教授
櫻井 祐子	名古屋工業大学 大学院工学研究科	教授
杉浦 孔明	慶應義塾大学 理工学部	教授
鈴木 大慈	東京大学 大学院情報理工学系研究科	教授
津田 宏治	東京大学 大学院新領域創成科学研究科	教授
常行 真司	東京大学 大学院理学系研究科 理化学研究所 最先端研究プラットフォーム連携（TRIP）事業本部	教授 プログラムディレクター
橋田 浩一	理化学研究所 革新知能統合研究センター	グループディレクター
橋本 幸士	京都大学 大学院理学研究科	教授
蓮尾 一郎	情報・システム研究機構 国立情報学研究所 アーキテクチャ科学研究系	教授
宮尾 祐介	東京大学 大学院情報理工学系研究科	教授
山崎 俊彦	東京大学 大学院情報理工学系研究科	教授
山田 拓司	東京科学大学 生命理工学院	准教授
横田 理央	東京科学大学 総合研究院 スーパーコンピューティング研究センター	教授

選考の観点

国家戦略分野の若手研究者及び博士後期課程学生の育成事業（BOOST）次世代AI人材育成プログラム（若手研究者支援）の選考の観点は、以下の通りです。

1. 目的・趣旨

我が国の次世代AI分野を牽引するけんいん若手研究者の育成などの本プログラムの趣旨および本提案募集の対象となる研究分野（募集要項「2.1 公募の対象となる研究分野」参照）の趣旨に合致していること。

2. 独創性・優位性

国内外の動向等を踏まえ、提案内容が独創性・優位性を有していること。

3. 目標・計画

実施期間内に達成する目標、実施計画および予算計画が具体的かつ適切であること。

4. 実施体制

提案内容の遂行に最適な実施体制を構築していること。

5. 遂行能力

提案内容の遂行に必要な責任能力を有していること。

また、研究費の「不合理な重複」ないし「過度の集中」に当たるかどうかも、選考の要素としました。

以上